

経済思想 期末レポート

アノミー理論を用いた、経済学部生における学生生活充実度についての考察

経済学部 経済学科 4年

片岡 凜

1. 序論

私は、デュルケムの『自殺論』で述べられている自殺の種類のひとつ、「アノミー的自殺」に興味を惹かれ、これに適用されているアノミー理論が、現代の学生生活にも当てはまる部分が多いのではないかと考えた。特に私自身が所属する経済学部の学生は、授業の出席率が低く、無気力状態に陥っているように感じる。そこで、特に経済学部生に焦点を当て、議論することにした。

2. アノミー論について

デュルケム『自殺論』(1897, 仏)では自殺について以下の4つの類型が示されている。

- ① 自己本位的自殺
- ② 集団本位的自殺
- ③ 宿命論的自殺
- ④ アノミー的自殺

まず初めに、テーマとして取り上げたアノミー的自殺について述べる。アノミーとは、端的に言えば欲求の無規制のことである。普段、多くの社会で規範・秩序などにより欲求が規制されているが、これがなくなると人々の欲求はとどまるところを知らなくなり、欲望・羨望が増進する。こうした欲求水準の上昇によってその充足が困難になり、ますます不安・苦痛・虚無感を持つようになってしまい、生きる意欲を失う。その結果として自殺につながる、というのがアノミー的自殺の考え方である。

また、アノミー状態は自殺のみならず「逸脱行動」も引き起こす。逸脱行動とは、ある特定の社会において共有されている社会規範に反するような行動のことで、以下のように5つに分類される。

- ① 同調(下層の者の犯罪)
- ② 革新
- ③ 儀礼主義(制度への過剰同調)
- ④ 逃避主義(アルコール中毒)
- ⑤ 反抗(反乱, デモ)

このように、アノミー状態であることは自殺につながるまでも反抗や逃避行動を引き

起こす

3. 経済学部生の学生生活

北海道大学において経済学部生は1日の授業時間も少なく(3限までにほとんどが終了),出席を毎回とる授業も少数である(授業出席への強制力が弱い).

一見自由な時間が多く取れ,充実度の高い学生生活を過ごすことができそうであるが,実際はこの現状がアノミー状態を引き起こすのではないか?

自由な時間が多くあり,興味のある分野の勉強・アルバイト・留学・旅行など好きなことに費やせる

「充実した学生生活が実現する」と思われる

しかしアノミー論に基づいて考えると,自由な時間を好きに使える状態は,充実度・満足度に対する基準を上昇させる

結果,自分の時間の使い方に満足できず,虚無感を感じながら過ごすことになる

4. 学生生活充実のための要因

まず一つ目として挙げられるのが,教員とのコミュニケーションである.

北尾・速水(1986)は動機づけを規定する要因として,「学習者」「課題や教」「教員」の3つを挙げている.その中の「教員」について考えた場合,教え方はもちろん,それ以外に教師が子供達の性格や心理をどれほどの確に掌握しているか,また教師のパーソナリティや態度も大きく影響を与える要因と考えられると指摘している.また,作田(2007)も「教員とのコミュニケーション」が「学習意欲」に大きく影響を与えると述べている.具体的には,教職履修学生が大学在学中にどのような要因で自らの能力を伸ばしたのかを分析した結果,「自らすすんで学習する」「知らないことや分からないことを積極的に調べる」

「社会での出来事・時事問題に関心を持ち情報を得る」「資料や情報に基づいて自分の意見を表現する」の4項目で構成された「知的活動力」が「授業の内容について教員に質問をする」「授業中にディスカッションをする」で構成された「学問的関与」と,「教員とよく談笑する」「授業以外で担当教員に相談や話をする」で構成された「教員への関与」が大きく影響しているとしている.二つ目として挙げられるのが,「友人とのコミュニケーション」である.

山田ら(1980)は,九州大学の卒業生に対して「大学生生活の満足度とその理由」を分析した結果,大学生生活で重要なことは「学業」もさることながら「友人・先輩・後輩のふれ合い」が大きな要素を占めるという結果となっている.鈴木・藤生(1999)は

「友達人数」及び「友達との良い経験」が大学満足度と相関関係にあることを指摘している.市川(2001)が「あいつには負けたくない」「あの人を目標に頑張ろう」といったライバ

ルに対する「自尊志向」、また、グループ学習において「人間関係を悪くしたくない」といったメンバーに対する「関係志向」が学習動機に繋がると指摘している。

ただし、「友人とのコミュニケーション」が「学習意欲」に直接影響を与えている先行研究は見出されなかった。

4. 「学習意欲」「学生生活の満足度」についての定義付け

溝上(1996)では、学習意欲を外発的動機付け・内発的動機付けに分類して述べている。

前者は単位を取るための手段としての学習であり、後者は学習自体が目的となっている。

本稿では褒美や賞賛がなくとも課題遂行そのものに興味・関心を持って自発的に動機付けられる内発動機付けによるものを「学習意欲」とする。

満足度に関しては、夏休みや短期的なイベントによるものではなく、「学業および日々の大学生活における充実感から起こる満足度」とする。

5. 経済学部生・他学部生へのインタビュー調査

① 大学生活において、充実していると感じるか(学業)

5:非常に感じる

4:まあ感じる

3:どちらでもない

2:あまり感じない

1:全く感じない

② 大学生活において、充実していると感じるか(プライベート)

5:非常に感じる

4:まあ感じる

3:どちらでもない

2:あまり感じない

1:全く感じない

③ 理想的な大学生活を送ることができていると感じるか

5:非常に感じる

4:まあ感じる

3:どちらでもない

2:あまり感じない

1:全く感じない

④自分の学生生活を見つめなおし、卒業後の進路に不安を感じる(感じていた)か

- 5: 非常に感じる
- 4: まあ感じる
- 3: どちらでもない
- 2: あまり感じない
- 1: 全く感じない

⑤大学の授業を楽しんでいると感じるか

- 5: 非常に感じる
- 4: まあ感じる
- 3: どちらでもない
- 2: あまり感じない
- 1: 全く感じない

⑥大学のゼミ・研究室を楽しんでいると感じるか

- 5: 非常に感じる
- 4: まあ感じる
- 3: どちらでもない
- 2: あまり感じない
- 1: 全く感じない

⑦サークル・課外活動を楽しんでいると感じるか

- 5: 非常に感じる
- 4: まあ感じる
- 3: どちらでもない
- 2: あまり感じない
- 1: 全く感じない

⑧アルバイトを楽しんでいると感じるか

- 5: 非常に感じる
- 4: まあ感じる
- 3: どちらでもない
- 2: あまり感じない
- 1: 全く感じない

これら8つの質問を経済学部生10名, 他学部生10名に対して行った。

経済学部生と他学部生の学生生活における満足度, 充実度について違いを分析し結論を導く。

調査結果は下記の通りである.

<経済学部生>

①大学生活において,充実していると感じるか(学業)

5:非常に感じる 0名

4:まあ感じる 2名

3:どちらでもない 4名

2:あまり感じない 3名

1:全く感じない 1名

②大学生活において,充実していると感じるか(プライベート)

5:非常に感じる 4名

4:まあ感じる 2名

3:どちらでもない 2名

2:あまり感じない 2名

1:全く感じない 0名

③理想的な大学生活を送ることができていると感じるか

5:非常に感じる 0名

4:まあ感じる 4名

3:どちらでもない 4名

2:あまり感じない 2名

1:全く感じない 0名

④自分の学生生活を見つめなおし,卒業後の進路に不安を感じる(感じていた)か

5:非常に感じる 7名

4:まあ感じる 3名

3:どちらでもない 0名

2:あまり感じない 0名

1:全く感じない 0名

⑤大学の授業を楽しんでいると感じるか

5:非常に感じる 0名

4:まあ感じる 2名

3:どちらでもない 5名

2:あまり感じない 2名

1:全く感じない 1名

⑥大学のゼミ・研究室を楽しんでいる(充実している)と感じるか

- 5: 非常に感じる 3名
- 4: まあ感じる 2名
- 3: どちらでもない 4名
- 2: あまり感じない 1名
- 1: 全く感じない 0名

⑦サークル・課外活動を楽しんでいる(充実している)と感じるか

- 5: 非常に感じる 3名
- 4: まあ感じる 3名
- 3: どちらでもない 0名
- 2: あまり感じない 2名
- 1: 全く感じない(無所属) 2名

⑧アルバイトを楽しんでいる(充実している)と感じるか

- 5: 非常に感じる 0名
- 4: まあ感じる 4名
- 3: どちらでもない 4名
- 2: あまり感じない 2名
- 1: 全く感じない(無所属) 0名

<他学部生>

①大学生活において、充実していると感じるか(学業)

- 5: 非常に感じる 6名
- 4: まあ感じる 1名
- 3: どちらでもない 2名
- 2: あまり感じない 1名
- 1: 全く感じない 0名

②大学生活において、充実していると感じるか(プライベート)

- 5: 非常に感じる 4名
- 4: まあ感じる 3名
- 3: どちらでもない 2名
- 2: あまり感じない 1名
- 1: 全く感じない 0名

④ 理想的な大学生活を送ることができていると感じるか

- 5: 非常に感じる 2名

- 4: まあ感じる 4名
- 3: どちらでもない 3名
- 2: あまり感じない 1名
- 1: 全く感じない 0名

④ 自分の学生生活を見つめなおし, 卒業後の進路に不安を感じる(感じていた)か

- 5: 非常に感じる 4名
- 4: まあ感じる 2名
- 3: どちらでもない 2名
- 2: あまり感じない 2名
- 1: 全く感じない 0名

⑤ 大学の授業を楽しいと感じるか

- 5: 非常に感じる 1名
- 4: まあ感じる 5名
- 3: どちらでもない 3名
- 2: あまり感じない 1名
- 1: 全く感じない 0名

⑥ 大学のゼミ・研究室を楽しい(充実している)と感じるか

- 5: 非常に感じる 6名
- 4: まあ感じる 2名
- 3: どちらでもない 1名
- 2: あまり感じない 0名
- 1: 全く感じない 0名

⑦ サークル・課外活動を楽しい(充実している)と感じるか

- 5: 非常に感じる 5名
- 4: まあ感じる 2名
- 3: どちらでもない 2名
- 2: あまり感じない 1名
- 1: 全く感じない(無所属) 0名

⑧ アルバイトを楽しい(充実している)と感じるか

- 5: 非常に感じる 2名
- 4: まあ感じる 4名
- 3: どちらでもない 3名
- 2: あまり感じない 1名

1: 全く感じない(無所属) 0名

このインタビューの結果を比較してみると、学業・研究室(ゼミ)に対する満足度に大きく差が現れていることがわかる。また、学校の授業を楽しんでいる割合も経済学部生に比べ他学部生の方が高くなっている。この理由としては、以下のようなものがあった。

「学部の授業を真面目に受けることと、良い企業に就職できることの関連性があるように思えず不安(経済3年・女)」

「出席を取らない授業が他学部より多いと感じる。初めこそ出席していたもののだんだんと来なくなる人が多い(経済4年・女)」

「ゼミは2時間ほどしかやらず、そのほとんどを教授が話しているだけ。楽なゼミが良かったので不満はないが、充実しているかと言われれば微妙(経済4年・男)」

「平日の大部分の時間を研究室で過ごしている。土日に行くこともあり正直忙しいが、充実している(情エレ4年・女)」

「元々やりたかった、興味がある研究ができていく(畜産4年・女)」

「学部の授業は面白い。進路は迷っており、少し不安(文3年・女)」

この結果から、経済学部生の多くは、学業が学位取得・就職のための手段となっており、外発的動機付けである側面が多いように見受けられた。他学部生については、主に理系の学生を中心としてそれぞれの興味関心がある分野についての研究ができていく点で、内発的動機付けによる学びであるといえる。

その多くが外発的動機付けによって動かされている経済学部生は、学問への純粋な欲求、探究心が欠けている場合がある。それにも関わらず、大企業に就職したい、周囲からリア充と思われたいなどの承認欲求はとどまるところを知らない。その結果、アノミー状態に陥り学生生活の充実感を感じることができなくなっているのではないかと考えていた。ただ、サークルやアルバイトなど日々の生活における満足度は経済学部生・他学部生ともに高く、学習意欲の差が大学生活全体の充実度に影響を与えているとは言えない、という結果となった。

6. 結論

結論として、学生生活全体を通して見た場合に経済学部生がアノミーからくる虚無感にさいなまれ満足度が低くなっているというわけではない。しかし、学業面のみでは他学部に比べて満足度も学習意欲も低いのが現状であり、授業に出席しない(逃避)ことや単位取得のためだけに学ぶなどという行動はやはりアノミー状態となっている部分があると考えられる。私自身も経済学部生の1人として、他学部生と同等あるいはそれ以上の充実感をもって

残りの大学生活を過ごしたいと考えている。インタビュー結果からわかる通り、そのためにはまず内発的動機付けをもって学業に取り組むことが不可欠である。純粋な興味を持って学問を修めるということはそれだけで「知りたい」という欲求を満たすことができ、小さくとも着実な達成感、充実感を得られるからである。その結果として、公務員、民間就職、大学院進学など自分に最も適した進路を見つけることができたならば、4年間の学生生活は有意義で充実したものとして振り返ることができるはずである。

7. 参考文献

- デュルケム, 宮島喬訳『自殺論』()
- フィリップ・ベナール, 杉山光信/三浦耕吉郎訳『デュルケムと女性、あるいは未完の「自殺論」』(新曜社, 1988)
- 見館好隆, 永井正洋他「大学生の学習意欲, 大学生の満足度を規定する要因について」(日本教育工学会論文誌, 2008)
- 小林淳一, 木村邦博他「考える社会学」(ミネルヴァ書房,)
- 鈴木由美, 藤生英行「女子大生の友人数と自己効力について: 大学満足度と過去の友人関係を中心として」(日本教育心理学会総会発表論文集, 1999)
- 梅崎修「成績・クラブ活動と就職—新規大卒市場におけるOBネットワークの利用, 大学教育効果の実証分析—ある国立大学卒業生たちのその後」(日本評論社, 2004)
- 山田裕章, 冷川昭子, 峰松修「学生生活の研究: 卒業後から見た大学生活の満足度」(健康科学, 1980)
- 溝上慎一「大学生の学習意欲」(京都大学高等教育研究, 1996)
- 國眼眞理子, 松下美知子, 苗田敏美「文系学部生の大学生活満足度・充実度と職業イメージとの関連—キャリア支援のための予備的検討—」(金沢大学大学教育開放センター紀要, 2005)
- 市川伸一「学ぶ意欲の心理学」(PHP 新書, 2001)
- 林未央「現代学生のプロフィール」(IDE 現代の高等教育, 2008)
- 永野仁「大学生の就職行動とその成果」(日本労務学会誌, 2002)
- 坂田浩之, 佐久田祐子, 奥田亮, 川上正浩「新入生オリエンテーションにおける獲得感と大学生卒業後から見た大学生活の満足度」(健康科学, 2007)
- 大学生協 学生生活実態調査
- イマ時の北大生(『よりよい生活と平和のために』第369号, 2017)
- イマ時の北大生(『よりよい生活と平和のために』第369号, 2017)
- イマ時の北大生(『よりよい生活と平和のために』第339号, 2012)

学生生活実態調査報告書(2018)